



Title	市井の郷土史家の手記(一)
Author(s)	圭室, 文雄
Citation	明治大学教養論集, 279: 121-145
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/10109">http://hdl.handle.net/10291/10109</a>
Rights	
Issue Date	1995-03-20
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

## 市井の郷土史家の手記（一） ～ 本田秀行筆記 ～

圭 室 文 雄

### はじめに

この手記を書かれたのは、一九九三年五月二十五日九十四歳で他界された熊本県阿蘇郡高森町の本田秀行氏である。本田氏は郷土史料の調査・研究を七十四歳からはじめられ、『高森地区御家人先祖附集成』『高森江戸時代史料』一・二『高森町史』『南郷谷史覚書』などをまとめて刊行しておられる。しかし遺稿となった『高森武田家に関する調査資料』は活字化されていない。

本田秀行氏は先祖である肥後国阿蘇郡高森武田家の系譜に関心をもたれ、これを基点として近世から近代に至る武田氏の足跡を、古文書、先祖附等をみずからの足でこまめに調査され、史料ならびに出典を明記し、刻明に記しておられる。ここに所収された史料のなかでもすでに散佚したものも多い。

戦国末期若狭国浪人の伝承をもつ武田氏の系譜三家が、肥後国阿蘇郡高森に居を構え、在地武士として生活し、その

ご帰農して代々惣庄屋として力量を發揮、領主から苗字帯刀の格式をうけ武士として道を開いた過程を、また一方で高森町で在郷商人として富を蓄積していく過程を、高森町ならびにその周辺の村々の地方文書、社寺に残る文書、棟札、華表（鳥居）、石造遺物、法華塔、墓碑、經典等の金石文等々から追跡しておられる。これこそ我々が忘れかけていた郷土史研究法の原点とでもいうべきものである。このような方法で調査研究を続けておられる篤学者は、現在でも全国にかなりおられるが、中央の学会誌等ではほとんど目にする機会がない。そこで今回本稿でとりあげることにした。民俗学者柳田国男の郷土研究の方法に啓発をうけた市井の郷土史家の論考として紹介する次第である。

太平洋戦争終結以後約五十年、日本史研究の中で地方史研究の分野はめざましい発展をとげ、全国で数多くの県史、市町村史が刊行されてきた。地方史研究協議会の雑誌「地方史研究」もすでに二五〇号を重ね、その研究もかなり蓄積されている。しかし最近では、農村生活の経験のない人、農村の知識のない人が農村史を研究する傾向が多く見られ、農民にとってはごく当り前の事がなかなか理解できず、底の浅い研究になって例もある。また地域設定もサンプル調査の対象地として選び、他地域との差異のみから比較研究する、という手法が多い。農民の信仰や習俗が年中行事・農事曆、との関連で行なわれていた事に視点が届かず、問題を区分して研究するため総体的把握が不可能になっている。もとより都市に育った研究者が地方の歴史を研究するのであるから、土着の生活風俗になじめないこともあり、やむをえないことともいえる。

とはいえ、本来あるべき郷土史としての研究法が忘れ去られてよいわけではない。地域に居を構え、数少ない史料の中から先人達の生き抜いて来た様子を綴る手法は、郷土史研究法の出発点であることは言を待たないであろう。このような方法論に再度立ち帰り一地方の歴史を掘りおこした跡を見たいと思ひ、この遺稿をとりあげた。

ここで本田氏の略歴について若干触れておく。氏は明治三十年（一八九七）、熊本県阿蘇郡草部村芹口浄土真宗本願

寺派永秀寺にて出生。草部村尋常小学校で四年間過したのち叔父が住職を務める高森町含藏寺（曹洞宗）に寄宿し、高森町高等小学校で四年間学ぶ。その後これまた叔父が住職をする鹿本郡八幡村杉日輪寺（曹洞宗）に寄宿し、八キロの道のりを通い県立鹿本中学に学んだ。卒業の後熊本県立第一師範学校に入學、大正六年（一九一七）卒業、同県天草郡本渡小学校へ赴任、以後熊本市池田小学校、東京都浅草区立育英小学校、麴区麴町小学校、麴町青年学校、東京都指導主事等一貫して教育畑を歩いてこられた。この間大正十三年（一九二四）日本大学専門部宗教科を卒業しておられる。以上の学歴を見ると、草深い山村の小寺に生まれ経済的にも恵まれなかった本田氏が旧制高校への進学もままならず、立身出世を夢見て師範学校を卒業のち上京、昼間教員をしながら夜学に通う、という明治生まれの篤学の青年の姿を伺うことが出来る。当時寒村の青年たちに共通する姿でもあった。

その後数々の職歴を経て、昭和四十六年（一九七一）、七十五歳の時に阿蘇山麓の高森町に隠棲しておられる。

その後、都市化の波が押し寄せ、旧家が次々と新しい家に建てかえられ、伝存史料が焼却されていくのを見るにつけ、何とか自分の手で史料保存をしなければ、というのが本田氏の気持ちであった。余生は歴史史料の保存に全力を注ごうという強い気持ちで、数々の史料を書き残された原動力であった。

最後に本稿の閲覧ならびに刊行を許されたご遺族本田きか氏には深甚の謝意を表する次第である。

## 『高森武田家に関する調査資料』

本 田 秀 行

## 目 次

### 一 緒 言

### 二 武田家略家系

三 武田家系譜

御惣庄屋系三家

吉右衛門家 三五郎家

四 武田家先祖のこと

五 高森手永御惣庄屋

六 武田家の人々

武田儀兵衛 武田一次 武田儀右衛門 武田準蔵

武田權作 武田一蔵

武田吉右衛門尉永勝 武田三五郎依勝

資料

一 武田家先祖附 忠蛇家 七郎次家 一蔵家

二 武田元二家過去帳控

三 墓碑銘 流芳院 松巖玄水 惠空院

四 納経帳 抜要

五 武田時雄家文書

六 武田家関係石造物等

七 武田儀右衛門家知行所文書

八 肥後続孝子伝 (武田庄作)

考證並跋

## 一、緒言

武田家は高森の旧家である。江戸時代の半ばまで非常に栄えた。本流は高森手永御惣庄屋として八十余年に亘りこの地区の統治に当った。支流の吉右衛門家及び三五郎家等は、豪商で、この地方の杜寺の造営に力を尽し、また多くの文化財を残している。御惣庄屋家は数流に分れたが、御惣庄屋を辞したあとは多くは藩士として仕え、その系譜もほぼ完全な形でわかつている。しかし町家となった吉右衛門家及び三五郎家は正確な記録に乏しく、系譜を完全に追跡することはできない。私は『高森町史』江戸時代を担当するに当り、多くの資料を蒐集し始めた。老齢で十分の資料を得ることは困難であった。しかし余命幾何もないので取りあえず判明しただけでも記録しておいて後の識者に引継ぎたいのである。従つてこれは中間報告で未定稿として発表したのである。この調査に当り、特に熊本市新屋敷武田元二氏、高森町の含蔵寺及び武田時雄氏の資料が本稿の骨子となつたのであつて、この便宜を与えていただいた事に深甚の謝意を表す。

## 二、武田家略家系

○武田大和守元實<sup>(1)</sup>

津留大藏入道一性

縫殿助元光

高森五左衛門始甚五元定 初代高森手永窓庄屋 忠左衛門元勝 二代御窓庄屋

高森忠左衛門元雅 三代御窓庄屋 高森忠左衛門元昭 四代御窓庄屋

武田儀兵衛(6)  
元朝 始御窓庄屋 郡奉行歷任

一次元貞(7) 藩士知行百石 左市郎員直 勘十郎 忠蛇 甚五

忠藏元直 儀右衛門元堅(3) 儀平太信正 準藏元長(8) 權作元幸(9) 一藏元直(10) 元熙

武田源四郎(2) 甚右衛門 茂平次 七郎次 悦助 喜七郎 源四郎  
弥兵衛(吉助) 吉助 津留弥次右衛門 傳次 長五郎  
彈之丞是勝

○武田吉右衛門尉永勝(4) 吉右衛門(元) 吉右衛門

忠之丞 團次 忠之丞 格三郎 團藏  
庄兵衛 庄作 格次 仁平

○武田三五郎依勝(5) 吉之丞 三五郎 貞吉

三五郎 — 源四郎 — 市郎次 — 文太郎  
時雄

三、武田家系譜 (カッコの数字は「武田家略家系」参照)

清和天皇 — 貞純親王 — 源 経基 — 頼義

義光 — 武田冠者義清 — 信義 — 信武

信成 甲斐武田家  
 氏信 — 信賢 若狭武田家 — 九代 — 信豊 — 義統  
 元實

(1) 武田大和守元實 誠義院一性明徹居士

若州ノ者永禄年中浪人肥後川尻ニ居住、阿蘇大宮司ヲ頼ミ高森囲ノ城ニ入ル 高森  
 伊予守ノ侍大将津留兵庫ノ養子トナリ、津留大蔵入道一性ト改ム 天正十四年正月  
 高森落城討死

藏人大蔵 信明 夢学院正三寿建居士 天正十四年高森落城討死



縫殿助

元光 決勝院宗林麟角 天正十二年病死  
妻熊井讀岐守女 次女色見岩下帶刀妻

高森五左衛門

元繁 始甚五 最白一徹禪定門 元和八年死  
妻長野村川島上総女

高森五左衛門

元定・忠左衛門觀室宗甫 寛永十四年死  
高森手永惣庄屋 妻梅芳妙信 寛永十三年死

高森忠左衛門

元勝 秋應用天 明曆三年死  
高森手永惣庄屋 妻月窓明清 寛文六年死

武田源四郎 (別記)

高森忠左衛門

元雅 日峯正愨 寛文十一年死 甚五右工門とも称す  
高森手永惣庄屋 妻心月寿姓 延宝四年死

高森忠左衛門

元昭 白峯院一室祖明 宝永五年死  
妻梅寿院智山惠空 寛保元年死

武田儀兵衛

元朝 初高森五左衛門・儀右衛門 自証院松山寿貞 元文四年死  
市原遊助次男 妻桂林院自四淨月 (元昭長女) 享保二年死  
後妻智鏡院松室寿繁 宝曆五年死

高森手永惣庄屋

宝永六年新知百石 高森手永代官 正徳二年阿蘇南郷御郡奉行役料

百石 同六年正月小国久住御郡奉行 同九年八月御國中廻仕諸役見聞役 同十年十一

月御番方 享保十九年隠居

忠藏 元直 元直院梅岩宗貞 享保三年死

一次 元貞 義山道勇 天明元年病死 荒瀬左平次男

元文二年十二月御勘定所御目附役 同四年二月御勘定頭 寛保二年御使番高五拾石御裏奥附役 宝曆六年御次 同九年御前様御附兼御裏御附 同九年胤次(細川治平)様御誕生御用懸 同十一年胤次様御髮置役 同十三年十一月胤次様御袴初之御介添役 同年十二月老衰御役御断

儀右衛門 元堅 (別記)

左一郎 員直 野尻佐次右工門養子 一次 實

丈五郎

勘十郎

忠蛇 拾石五人扶持 御中小姓 甚五

(2)武田源四郎 慈光院巨海了心 延宝七年死 步御使番 高森在宅

甚右衛門 悟石道鉄 正徳四年死 高森町人

茂平次 仙岩道寿 長岡家中太田又助悴 宝曆四年死 享保十四年一領一疋 毎年本儀七俵拜領

七郎次 法田秀苗 實政四年死 津留弥次右衛門悴 宝曆四年一領一疋

悦助 文政三年死 實政五年一領一疋

勝弥 喜七郎 文政三年一領一疋

定助後源四郎 明治九年十二月久住山疏黃取方御用懸（在勤中諸役人□）

当家御赦免野開畑四町九反五畝貳拾七步所持

(3)武田儀石衛門

元堅（元敦） 諸省院完戒道頭 宝曆十一年死  
享保十九年御知行三拾石御番方 寛延二年參勤人馬奉行  
妻慈明院仙岩寿昌 安永五年死

儀平太 信正 永伝院清岩慥白 安永四年死

宝曆十二年知行繼承三拾石 細川重賢南郷放鷹ノ時当家止留  
妻清智院淨室惠光 明和元年死

準蔵 元長 梅仙院春山義光 文政六年死 六十五歳  
安永五年跡目御擬作三拾石御番方

權作 元幸 桃仙院春岳良雲長尾家出 嘉永三年死  
七人扶持二ノ丸御番留守居 中小姓御足高拾五石 妻眞桐院寿山智童 嘉永五年死

一蔵 元直 良仙院真觀自性 明治八年死 五十歳  
七人扶持御中小姓相州及小倉出陣 妻貞鏡院寒林妙光 大正五年死

元焔 虚心庵智得元焔居士 昭和廿五年十二月死 八十四歳  
古流茶道十三代宗匠

円福寺墓地

寛文十一年月峯正慧居士（高森甚五左ノ門元雅、延宝四年心月寿性信女 寛文十一年兼窓妙全信女  
明和□冬嶺晚翠居士 元禄五年奉書写大乘妙典一字一石渡辺伝内 寛保十年恵心流源信女

元文四年白松院松山寿貞 享保二十年梅岩宗貞居士 武田忠義元直 享保二年自覚□幻大姉

(参考) 坂梨市原氏

寛文八年慧妙良智信女(寿慶老母) 寛永十八年玉峯妙萃信女 寛文四年白龍□□居士  
寛永五年詳雲院秀峯宗英(市原遊祐盛継) 元治元年性寛寿見居士  
元禄十二年清閑院殿月窓全池大姉  
明曆三年秋應用天居士(高森甚右工門尉源元勝 寛文六年月窓明晴信女)

市原助兵衛 初代坂梨御惣庄屋 六代迄御惣庄屋  
六代目弟市原民次 野尻手永御惣庄屋 姓を菅と改正

(4) 武田吉右衛門尉永勝

流芳院道寧春山 宝永五年九月死 父 武田忠左衛門元勝  
妻桃林院久庵慶昌 享保二年二月死 母 月窓妙清  
元禄十年月窓妙清信女(忠左衛門元勝妻)  
のために円福寺に一字一石塔を建つ

彈之丞是勝 稱津留和宗次永光 松巖玄水居士 享保二年九月死 三十三歳  
細川綱利二十二辞官仕養病京兆及浪華

満女(市原家養女) 惠心院霽月寿円 明和五年四月死

吉右衛門 武田三五郎依勝三男吉平元経 德源院宝流道川 寛保二年九月死

吉右衛門憲勝 玉生院心田髓潤 天明五年十二月死 五十四歳 団之丞  
始津留宗治郎 後改古曆 妻本淨院蓮室貞香 天明七年七月死

忠之丞信勝 常運院雪峯白道 天明八年十二月死 四十一歳  
妻智臺院慧性妙容 八十一歳 文久三年死 前安清院禪室貞心大姉 安永二年死

團次

碧樹院夏山良月 文政五年死  
妻柳長院妙慈自性 文化十二年死  
智喜院慧性妙蓉 文久三年 忠之丞母

忠之丞

泰嶽院宝山秋林 嘉永二年七月死  
元卯次郎(宇治郎) 妻松寿院心性妙淨 明治三十八年三月死 八十九歲(坂梨菅氏)

多賀智泉院慧寂妙流

明治十三年五月死 四十四歲

格三郎

野原栗屋家ヨリ養子 天眞院壽覺惟空 明治二十八年死 六十九歲  
高森町初代郵便局長

團藏 大正八年於大阪死  
無子絶家

庄兵衛

覺重院仙岩養水 文政九年八月死  
妻慈仙院宗林貞寿 天保八年七月死

庄作

知足院坦然崇義 慶應三年十二月死  
妻心月妙空 明治十二年九月死

格次

覺樹院體露宗円 明治十七年九月死  
妻

仁平

大乘妙典

元禄十六年

含藏寺一字一石塔 永勝建立 先妣快林快慶<sup>三十三回忌</sup> 供養大乘妙典<sup>三十三回忌</sup>

快林妙慶は永勝実母か(元勝ノ妾か)

(本田秀行調査)

(2) 武田源四郎 慈光院巨海了心 延宝七年死  
妻積善院快岩寿慶 明曆三年死

(5) 三五郎依勝 寛外院元教休司 享保十五年死  
妻江月院本然浄因 元禄五年死

吉之丞元喬 泰謙院堅山道録 延享五年死  
妻芳泉院慧心流源 享保十二年死

藤三郎元連 洞門了源 享保九年死

吉平元経 吉右衛門家ヲ継グ

三五郎 天祐院慈峯了雲 文化元年死  
妻真明院法肩是因 文化元年死

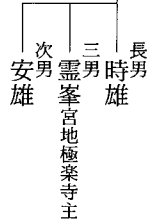
貞吉 養子(三五郎長女だいの婿)高尾野井上丸平八弟 康宵院宝岳現貞 文化八年死  
妻心慈院鶴林妙照 安永十年死

三五郎 養子ハ貞吉娘さいの婿 下町野尻新兵衛二男大休院実参道悟 天保十四年死  
高森町別当役 妻宝樹院寒庭智雪 文化六年死

源四郎 徳彰院春山道光 嘉永二年死  
前妻節操院実相妙貞 天保九年死 後妻蓮室妙臺 明治七年死  
高森町別当役

市郎次 穿天院流谷宗潭 明治十三年死  
妻芳樹院春山妙林 明治廿七年死

文太郎



#### 四、武田家の先祖のこと

武田家の先祖附は三家分が残っている。武田忠蛇家（武田大和守元実系）・武田七郎次家（武田源四郎系）・武田一蔵家（武田儀右衛門元堅系）である。そして三家共若干その所伝を異にしている。

一、「武田七郎次家」私の先祖は若狭（福井県）の者で武田大和守と申した。永禄年中（一五五八―七〇）浪人いたし当国（肥後）へ下り川尻へ暫く居住した処、阿蘇大宮司方に頼み南郷<sup>かた</sup>の城に引越した。但しその年月等はわからぬ。大和守は高森伊豫守惟居の侍大将津留兵庫の養子と成り津留大蔵入道一性と改め申した。その後大宮司方は薩摩（島津氏）と合戦になり、高森伊豫守と共に高森<sup>たけの</sup>の城に籠城いたし、天正十四年（一五八六）正月廿三日落城、伊豫守切腹、大蔵は一族と共に討死した。大蔵の嫡子縫殿<sup>ぬいのすけ</sup>助も討死した。末子に甚五郎があり幼年であったが、伊豫守の嫡子源次郎と申す者と共に豊後（大分県）大友家に人質に遣わされていたが、高森落城後たち帰り高森村に居住いたした。右の甚五郎が後に五左衛門と改名いたした。

二、「武田一蔵家」私の先祖は武田大和守で、若狭（現小浜市内）宮川荘を領し大谷に居城していたが、故あって永禄年中若狭を出で肥後に下り暫く河尻に居住した由、乱世の時であるので一子武田大蔵は阿蘇大宮司に頼み南郷高森<sup>かた</sup>加<sup>か</sup>固<sup>こ</sup>位の岩に居城いたした。薩摩（島津）と攻戦の時高森伊豫守惟居と心を合わせ高森本城の山城に籠城いたした。薩州勢

が城を攻囲し天正十四年正月廿三日終に落城、伊豫守切腹、大蔵は寄手の大将深水撰津守、溝口石見、宮原何某と鎧を  
合わせ三人共討取り、その外軍卒等も討ち取り一族共討死いたした。右大蔵嫡子武田縫殿助と申す者の末子、武田甚五  
は幼年であり乳母が連れ退いて近郷にかくれ住んだ、甚五が五左衛門と改名いたした。

三、「武田忠蛇家」私の先祖大和守は若狭の者で宮川莊を領し大谷に居城して居った処、わけあつて永禄年中この国に  
下り河尻に居住いたした。乱世の頃で一子武田大蔵浪人仕り、阿蘇大宮司を頼み阿蘇郡南郷高森に引き移り居住いたし  
ていた処、薩摩と合戦の砌、城主高森伊豫守惟居と心を合わせ高森かこひの城に籠城いたした処、薩州勢が攻め困ん  
だ。天正十四年正月廿三日落城、伊豫守切腹いたし、大蔵も寄手の侍大将深水撰津守・溝口石見・宮原何某と鎧を合わ  
せ討ち取る。その外軍卒など討ち取つて一類と共に討死いたした。

右大蔵嫡子武田縫殿助と申す者の末子武田甚五幼年であつたのを乳母介抱いたし高森村に居住いたした。甚五は後に  
五左衛門と名を改めた。右五左衛門の子を忠左衛門と申した。なお元和三年（一六一七）、津留忠左衛門が若狭藩医高  
森正因（伊予守曾孫）に当てた書信の一節、

今度豊後（大友・高橋）薩摩分目の一戦たるによつて、高森先手仕り薩摩勢を追込み、其後公方へ（阿蘇大宮司）一言上いたし、いずれも立身  
は望みに任せる事を申し合わせ、城を堅く籠り居った処、同十四年正月廿三日薩摩より新納武蔵・稲富新介両大将に  
てさし遣わし、寄手には熊ノ庄をはじめ、阿蘇一家の侍、宇土・合志・城・赤星・日向高知尾勢、その中でも先陣に  
は球磨相良の一家残らず押し寄せた故、大方南郷へは敵勢完全の備えとなつた。（中略）大将武蔵・新介擲手にまわ  
り手勢を以て攻め入つたので、（肥後）大手から攻め入つた。高森家人もここを先途と戦つたけれ共、多勢に無勢どう  
にもならず何れも討死した。乙名の津留大蔵入道一性と申す者、一番に相良家公文所溝口石見、二番に球磨添大将宮  
原、三番に相良名代の大将深水撰津の三人を討ち取り、其の後一類一所に集り、一度に大勢駈け入つて命を限りに相



働き討死いたした故、城内に搦手より攻め入った者、又は城外に在った者共は、同志討ちにて大勢戦死いたし、深堀は二重に死人で埋まり申した由である。高森紹信(惟直)も本意なく存じ、一先豊州(豊後)へ落ゆき、重ねて本意を遂げようと思ひ、豊後に向け落ちてゆくところに、薩摩方高知尾興呂木因幡大勢にて追いかけたので、今は叶わずと思ひ自害いたし相果てた。大蔵子蔵人、孫は甚五と申す者に大蔵は申した。我等一類ここにて討死するので、侍女二人は豊後へ落ちてゆき、源二郎殿を今一度取り立てるようにと申し付けられた。一所に討死仕るよう申したが、しきりに忠孝の道を申したので豊後に落ちていった。大閣様九州下向の時、黒田如水公(秀高)へ申し上げたので、源次郎へ御扶助になり、その後如水公の御添状を以て、加藤清正公より知行三百石源二郎へ拝領させられた。

以上の資料により伝承に若干の相違があり殊に武田大和守が津留兵庫の養子となり、津留大蔵入道一性となつて高森城攻防戦に戦死したということ、大和守一子大蔵が高森城戦に加つたということは大きな相違点である。しかし元和三年の書信が前説に拠つてゐることは時代が古いだけに信憑性であろう。また甚五についても縫殿助の子息とするものと末弟とするものがある。更に武田一蔵家の過去帳によると縫殿助は蔵人の嫡子で高森落城前天正十二年(一五八四)病死と見えてゐる。今のところ容易に決定しがたい。

## 五、高森家手永御惣庄屋

武田五左衛門悴忠左衛門は高森手永御惣庄屋に任命されるのであるが、それには次のような挿話がある。「忠蛇家先祖附」に忠左衛門は寛永年中(一六二四—一六四四)に妙解院(みょうげいん)（細川忠利）が肥後藩主として入国(一六三二)（寛永九年）の上寛永十一年秋南郷地方を巡覧（視察）した際、五左衛門宅へ止宿され忠左衛門を召し出され、先祖の事など委しく尋ねられた。すると忠利は大層感心され、直筆の御歌など賜つたという。そしてついで高森手永御惣庄屋に任命されたことになつてゐる。

高森手永というのは旧高森町村、旧色見村、現白水村等をその地域とする藩政時代の行政単位である。その役所を会所といい、始め高森町に在り後吉田新町に移った。御惣庄屋は藩主の代官として貢租納入の責任者であり、その地域の行政に当った。

江戸時代初期には主にその地域の名家旧家のうち才能すぐれた者が任命され、ほとんど世襲であり、この地方では式拾石あるいは三拾石の知行が与えられた。初期の御惣庄屋は多くその手永名を名乗った。その歴代は次のとおりである。

高森五左衛門 後忠左衛門

元定

(一六三七)  
寛永十四年死 任命は寛永九年カ

高森忠左衛門

元勝

(一六五六)  
明暦二年死

高森忠左衛門

元雅

(一六七一)  
寛文十一年死

高森忠左衛門

元昭

(一七〇八)  
宝永五年死

元昭は死亡前に御惣庄屋を元朝に嗣がせていたようである。

武田儀兵衛

元朝

(一七一三)  
正徳二年迄

以上八十年に亘りこの地域の支配に当った。その間会所はその私宅を当てたようである。なおこのあとは選任制となり幕末まで百七拾年間に二十六名が交替した。

#### 六、武田家の人々（事跡のわかっている者）（氏名の下のカッコの数字は「武田略家系」参照）

##### 「武田儀兵衛」(6)

儀兵衛、諱は元朝、(坂梨)市原遊助の二男で武田家四代御惣庄屋忠左衛門元昭の養子になり、既に延宝の頃から養父に代つ

て惣庄屋の職にあつたようである。藩主綱利の代宝永六年八月には惣庄屋を免ぜられ高森手永代官役となり新知百石を受けた。ついでその人物と才能を認められ正徳二年には拔擢されて「阿蘇南郷御郡奉行」を命ぜられその役料百石を加えられた。更に同六年四月には小国久住御郡奉行に転じた。其の間大いに治績をあげ、藩主より御紋付上下・御小袖・御帷子を頂戴した。同九年八月には「御國中廻在諸役見分役」の職に就いた。同十年十一月老衰の故を以て退き藩庁に入り御番方として勤仕した。儀兵衛は伝来の野開田畑等（開墾地）が甚だ多く富裕であつた。そして檀那寺である含蔵寺に享保八年、白川色見の畑八町八反四敏六歩（八、八ヘクタール）を寄進した。この畑の収獲高は三拾石ありその中から八石が含蔵寺の収入となり、同寺の経済的基礎が確立した。私人の知行寄進は許されていないので藩主寄進の形となつた。儀兵衛は元文四年十二月に死去したが、同寺過去帳には当寺中興開基自性院松山寿貞居士と記されている。

「武田一次」(7)

一次、諱は元貞、藩士荒瀬左平の次男で儀兵衛の養子となり享保十九年家督を相続し養父と同じく御番方となつた。人物、才幹共に勝れ、藩主の寵過を得てその親近に奉仕した。その経歴は次のとおりである。

元文二年十二月 御勘定所御目附役

同 四年 御勘定頭

寛保二年 御使番（高五拾石・御役料）御裏奥附役

延享三年正月 映心院（宗孝生母）嘉和姫・三千姫（共二宗孝妹）御供江戸詰

宝曆六年七月 御次役

同 九年二月 御前様御附・御裏御附兼帯細川胤次（後の治年）御用懸

同十一年十一月 胤次様御髪置の節御髪置役

同十三年十一月 同御袴御召物御介添役

明和元年十二月 老衰のため御役御断(一七六四)

天明元年 九月病死した。胤次が藩主(治年)となったのは七年後の天明九年である。義山道勇。墓所円福寺。(一七八)

### 「武田儀右衛門」(3)

諱は元堅、儀兵衛二男であったが、養子一次が家督相続したので別家を創立した。一次はその所領百石の内三拾石を儀右衛門に領知した。その明細は地方知行の実態を示す貴重な資料である。儀右衛門は御番方として勤仕した。(一七四九)  
寛延二年藩主江戸参勤の節野津原鶴崎人馬奉行を勤めた。宝曆十一年には幕府巡見使一行が日向より肥後に入国の際は南郷岩神口御番役仰付けられたが病気の為出仕できず宝曆十一年死去した。(一七六一)

この家は藩士身分で熊本在住が原則であったが御赦免地所有の関係から高森に在宅を願って許され現在の天神地区上方に宏壮なる邸宅を構え居住した。宝曆十二年十二月藩主重賢が南郷に鷹狩をした時にはこの宅に止宿した。(一七六二)

### 「武田準蔵」(8)

安永五年父儀平太の跡目相続、御擬作三拾石、御番方、寛政元年、幕府巡検使御宿を自勤で勤めた。文化六年駄飼原調練・薄場河原調練、同九年小峯山調練に参加した。同十年御留守居御番方となる。(一七八九)

### 「武田権作」(9)

文政六年、七人扶持御中小姓、同十年二ノ丸上御番、同十三年御留守居中小姓組脇、足高拾石。(一八三三)

### 「武田一蔵」(10)

嘉永三年七人扶持御中小姓、安政二年相州御備場詰(文武稽古)、元治元年宮内御附御目附、小倉合戦御供。慶応元年御出馬斥候。二年八月御近習御目附、足高拾石、同年九月御日記懸、同三年御鉄炮懸、明治元年御上京御供。明治二年(一八五〇)  
(一八五五)  
(文武稽古)  
(世話役)  
(一八六四)  
(一八六八)  
(一八六三)

少従。同三年御腰物御用。同年庶務、組附御中小姓、同四年より家祿改めにより五拾俵。

「武田吉右衛門尉永勝」(4) (妻桃林院は坂梨御惣庄屋市原家の娘と推定される。その両親の墓を円福寺に建てている)

高森でその名を石造物に残したことに於て永勝に及ぶものはない。それでいてその出自経歴については殆ど知られるところがない。(吉右衛門は母月窓明晴信女のために寛文六年にその葬儀法要を営み元禄十二年には円福寺にその供養のため供養塔をたてている)

含藏寺にある墓碑は頭部に精巧な四天王像を戴く豪壮なものであるが、刻文は「妙法蓮華経経塔銘并序」となつて居り、永勝死去の一年前宝永四年に江州(現滋賀県)安養律寺の湛堂慧淑により執筆されたものである。これには次のように記してある。(伝記の部分だけを抜き書きする)

「余は数年前肥後熊本に遊化した。その時阿蘇山に登り南郷に至つた。その時永勝はその一族と共に含藏禅寺に私を招いて供養の誠を尽した。永勝は妙法蓮華経を尊信する心厚く塔銘の作成を請うた。そこでその請いに応えて本文を作つた。抑々永勝の家は富裕で国内でも著明である。これは先祖が善を修し徳を積んだお陰である。積善の家に余慶ありの語のとおりである。彼は富豪であるが謙遜して徳を積みいつもその及ばざるを恐れた。彼は法華経を諸経の王として尊信し、僧侶に請うて一万部を読誦させ、一石に妙経の一字を書写して三部となし淨処に埋鎮した。またわが国六十六国を自ら遍歴し一国毎に法華経一部八巻を納めた。更に仁王般若経一万部と宝篋印陀羅尼三百六十巻を書写させ、大蔵経を購買して寺に安置した。終りに高野山に燈籠を献じて法燈を悠久に継いだ」というものである。よほどの富豪でなくては不可能のことである。

この文中にある六十六国廻国参拝については、まだ江戸初期のことであり非常に困難であるので、その実現に疑問を持つていたが、熊本新屋敷武田家に於て納経帳を拝見するを得てその実なるを知つた。納経帳は二巻あり何れも十数米に及ぶ長巻のものである。その序を宝永二年(一七〇五)に山門(比叡山廷曆寺)正観院玄海という僧が選述している。その要は次

のとおりである。

「阿蘇郡高森住武田永勝は現世と来世の願をこめて六十六部の法華經を携えて五畿七道の靈地に納めようと決意した。そこで去る元祿十三年(一七〇〇)まず南海の阿波・讃岐・伊予・土佐・豊後の五国に納め終った。そして元祿十五年以降に残余の国々を廻つて素願を全うしたいとしている。永勝はこの功德によつて現世には家内安全、後生には安養不退の台に上るであろう」これに次いで各国巡拝の靈地をあげ、その地毎にその由来と現当二世の願文をその社寺の長おとが記し署名している。各靈場には法華經一部八巻と志百疋(現在に換算して約二万五千円)を納めている。この納経帳には二十九の靈場が記されている。(詳細は資料を参照)

元祿十三年八月〜十月 豊後・伊予・讃岐・阿波・土佐

同 十五年八月 大隅・薩摩

宝永元年八月 筑後・筑前・肥前・豊前

宝永四年二月〜五月 長門・周防・安芸・備前・備中・備後・美作・播磨・摂津・河内・和泉・紀伊・伊勢・志摩・

大和・山城

この短期間に巡拝するにあつては一行数名、舟・かご・馬を利用したことであろうし、その経費も莫大であつたろう。しかし宝永五年九月には永勝は死去しているので、六十六国完拝したかどうかは今更知る由もない。

なお高森穿戸羅漢山諸佛像及久木野羅漢窟の釈迦像等の造立は宝永四年(一七〇七)の八月と十一月である。

納経帳二巻と申したがこれの一卷は市原萬女まんの分である。満まんとも記す。この巻の序にはやはり山門正観院の僧正の序がある。

「ここに高森住武田永勝の娘其の名を萬という。永勝は子に縁がないので生まれた女子は市原氏に請うて名付親とし

た。永勝は累年所願があつて今のたび回国の志を発した。萬と実父は願望するところは同じである。しかし萬はまだ幼くして山川長途の旅には耐えられない。そこで代人を立て実父とともに回国納経の途に立たしめた。この芳志により厄災を避け慶賀を家門に招くであらう。」

萬女の墓が含藏寺にある。恵心院霽月寿円大姉という。明和七年(一七七〇)に七十四歳で死亡している。逆算すると元禄九年の生まれである。従つて初度回国の元禄十三年には五歳であり、宝永四年には十三歳であつた。

吉右衛門永勝の長子は禅之丞是勝である。「松巖玄水居士」と記してある。その塔は含藏寺に在り、享保十五年(一七三〇)に津留宗次郎憲勝造立となつて居る。憲勝は萬まの嫡子であり吉右衛門家を嗣いだと推定される。その碑文の要は次のとおりである。

「松巖玄水居士は南郷高森村の産である。十二歳で細川綱利に仕え、武田弾之丞是勝と称した。年二十五で病を以て官を辞し、その際津留和宗次永光と改めた。先祖を尋ねると武田大和守の嫡男武田大藏氏重が南郷の津留村を領し津留一性と称した。これが居士六代の先祖である。居士は氣象すぐれていたが、多病であつて京都や大坂で医師にかゝり療養につとめた。然し人間の寿命は如何ともしがたい、今歳三十三歳で大坂日本橋の寓居でなくなつた。そこで護国山太平禅寺に葬つた。本年秋分骨して此の地に埋め石塔を建てるとあり時に享保十五年(一七三〇)八月とある。この年月は玄水居士の死去のものでなく、分骨改葬の時のものである。

また萬(満)女の墓碑銘は次のようなものである。

「大姉は名は満、武田吉右衛門尉永勝の嫡女である。婿を同姓より迎え家を治めた。先の国君綱利公の時、其の家が多額の金子を上納したので毎年十五人扶持(一人扶持一石八斗)を受けていたが、大姉は桃林院(吉右衛門永勝の妻)の嫡女であるのでそれを受け継いだ。大姉は天性温良で佛教を深く信じた。七十四歳で死去した」。これはその倅であ

吉右衛門憲勝（津留宗次郎ともいう）が明和七年（一七七〇）に建てたものである。

また流芳院（永勝）の塔前に（今は塔後に埋没している）「奉納書写妙典石櫃」があり宝永七年九月二日孝子武田清吉・市原氏童女とある。（市原家は坂梨御窓、庄屋家である。）

吉右衛門尉永勝には子の縁がなかったと記してあったが含蔵寺の過去帳に吉右衛門の子として如電・幻泡の幼児法名があることによっても推することができる。（一六九二）元禄五年に永勝の妻桃林院が尺司に地藏堂を改修し、そこに木彫地藏菩薩立像を安置した事も、これらの幼死の子に対する菩提のためであったとも推察される。

矢村社の南側の観音堂前に一对の石燈籠がある。それには、

奉寄進石燈籠一对宝永四天八月吉祥日

宝篋印塔御宝前

施主 武田吉右衛門永勝

とある。これも死の前年である。今この宝篋印塔は存在しない。明治維新の神仏分離の際撤去され、そのあとに境内の観音堂を移築したものと推察される。宝篋印塔は墓碑である。推察するに吉右衛門には宝篋印陀羅尼三百六十巻書写のことがあり、これをここに埋鎮して塔を立て供養したのではあるまいか。現在塔が失われてその供養者は不明であるが、その父母である可能性も大きいと思料される。

最後に永勝は当時藩内でも有数の富家と伝えられているが、ここに挙げた事例によってもそれは十分に推察される。勿論先代からの蓄積もあつたろうが、致富の根源は何であつたろうか。高森町の桐原史吉氏は葉煙草の買い占め、大坂への移出を考えていられる。草部馬場の後藤家の寛政三年（一七九二）、同五年の貸金台帳の質・抵当物件を見ると農産で最も多いのは葉煙草である。煙草の栽培は江戸時代初期に始まるがこの地域は火山灰土質で畑地が多かったので早く普及したの



であろう。元禄期あたりは喫煙の風が盛んになり葉煙草の需要が高まり上方では価格の高騰を見た。武田家はこの地域の煙草を買い占め大坂に送り巨利を得たのではなからうか。大坂や京師に店舗を持っていたのかも知れない。しかしこのような事業は生産地と需要地の価格の落差を利用したものであるから余り長い繁栄は持続されなかつたと推察される。

〔武田三五郎依勝〕(5)

三五郎依勝の系譜もあまりはつきりしない。矢村社や含蔵寺の石造物に吉右衛門と連記のものがいくつあるのにより兄弟ではないかとも思われるが後記の考證に見る如く全面的には肯定できない。しかしきわめて親縁的であつたことは、その三男を吉右衛門の養子にしたことでも明らかである。三五郎については誠に資料が乏しい。含蔵寺過去帳に次のように見られる。

積善院快岩寿慶禅尼

(一六五七)  
明暦三年五月

武田三五郎母

江月院本然淨因

(一六九二)  
元禄五年七月

武田三五郎妻

浄光院兼窓明全

(一七〇九)  
宝永六年三月

武田三五郎姥

覚外院元教休可

(一七三〇)  
享保十五年 十一月

武田三五郎

三五郎は早く妻に別れており、そしてその後妻の記載が見えぬところから少なくとも表面上独身であつたらうか。江

月院・覚外院とも墓は円福寺にあるが、共に墓台上に如意輪観音石像が安置してある。江月院の墓塔は宝永初期のもので極めて秀麗である。三五郎は吉右衛門よりおくれて死去し、享保九年(一七二四)合藏寺佛殿の再興には武田家一族の長老として、その総奉行に当たっている。それ以後の家系は時雄家文書で大体判明する。

江戸時代末期には、その子孫である三五郎及び源四郎が高森町別当として政治的手腕を發揮し、藩庁より賞賜を受けている。

吉右衛門家は町家として「えびす屋」を称している。幕末明治の頃豊後屋の西下にあつた。

(たまむろ・ふみお 商学部教授)